

The National Conference of Community Cinemas 2010 in Yamaguchi

全国コミュニティシネマ会議 2010 イン 山口

2010年9月10日(金)・11日(土)

会場:

■ 山口情報芸術センター[YCAM]

住所 山口県山口市中園町 7-7

Tel: 083-901-2222 HP: <http://www.ycam.jp/>

(添付会場案内図参照)

参加費:

会議 2,000 円

※ 9月10日、11日共に参加可。一部のみの参加も同じ。映画上映は含まれません。

※ コミュニティシネマセンター会員は会議のみ無料です。(1団体2名まで)

※ 山口市在住の団体・個人は会議のみ無料 (要申込・お問合せは山口情報芸術センターまで)

※ 定員 200 名

レセプション 3,000 円

映画上映 1 作品 1,000 円

主催:財団法人山口市文化振興財団/一般社団法人コミュニティシネマセンター

協力:アテネ・フランセ文化センター

後援:山口市/山口市教育委員会

支援:文化庁 平成 22 年度文化庁芸術団体人材育成支援事業

申し込み締め切り 9 月 3 日 (金)

参加を希望される方は、別紙の申込用紙にご記入の上、

9 月 3 日(金)までにファクシミリ(FAX.03-3461-0760)にてご送付ください。

ご出席申し込みに対しては、折り返し確認書をお送り致します。

※ 内容(出演者等)は変更になる場合がございます。ご了承ください。

※ 定員を越えた場合、お申込を受けられない場合がございます。ご了承ください。

お問い合わせ

コミュニティシネマセンター TEL:050-3535-1573 FAX:03-3461-0760 <http://www.jc3.jp>

“メディア芸術センター”としてのコミュニティシネマの可能性

“メディア芸術”……最近、よく耳にする言葉です。

でも、メディア芸術って、何を指しているのでしょうか。

文化芸術振興基本法では、メディア芸術は「映画、漫画、アニメーション及びコンピュータその他の電子機器等を利用した芸術」と定義されています。

2001年に文化芸術振興基本法が成立し、映画はメディア芸術のひとつに位置づけられました。

基本法の成立から10年、いま関心を集めているのは「メディア芸術の振興」です。

メディア芸術の振興は、コミュニティシネマにとって、どんな意味を持つのでしょうか。

今年は“デジタルシネマ元年”といわれ、大手の映画館のデジタル化が一気に進められようとしています。

映画館の有り様は大きく様変わりするでしょう。

コミュニティシネマは、デジタルシネマ化にどう向き合うべきなのでしょう。

今回の全国コミュニティシネマ会議は、

「“メディア芸術センター”としてのコミュニティシネマの可能性」をテーマに、

コミュニティシネマの「未来像」を考えます。

会場となる山口情報芸術センターは、「コンピュータや通信技術などを使ったメディアテクノロジーを共有プラットフォームとして、メディアアート作品の展示、演劇、ダンスパフォーマンスの公演、映画上映、サウンドイベント、ワークショップやレクチャーなどを開催」する文化施設として、開館以来、先鋭的な事業を展開しています。今回のテーマを話し合うには最適な会場といえるでしょう。

今回も充実した内容を準備しております。

多くの皆様のご参加をお待ちしています。

「全国コミュニティシネマ会議」

この会議は、さまざまな場で“映画を見せること”を行っている人々の情報交換と研究討議の場として、1996年から毎年会場を変えながら開催しており、今年で開催で15回目となります。ミニシアターを中心とした興行関係者や、フィルム・アーカイヴやライブラリーなど公立の映画専門施設(シネマテーク)関係者、映画祭関係者、公共ホール・美術館・図書館の映像担当者、シネクラブの主催者、自主上映団体、独立系配給会社等々、例年150人を超える参加者を得ています。映画の上映に興味のある方ならどなたでも自由にご参加いただけます。

プログラム

※出演者等は変更になる場合がございます。ご了承ください。

9月10日[金]

10:00-12:00 プレ・ワークショップ(分科会)

[1] シネマテーク・プロジェクト部会 「外国映画の特集上映の実現 A to Z」

シネマテーク・プロジェクトの今年の企画は「ポルトガル映画祭 2010—マノエル・ド・オリヴェイラとポルトガル映画の巨匠たち」、日本初公開となる 5 作品を含め、12 作品を全国に巡回します。このワークショップでは、外国映画の特集上映はどのような行程を経て実現されるのかを、ポルトガル映画祭 2010 が実現するまでの具体的なスケジュールや予算書を参考に考えてみます。来年度のシネマテーク・プロジェクトについても話し合います。

[2] シネマ・シンジケート部会 「映画館と観客の関係を考える」

シネマ・シンジケートでは、来年、函館の「シネマ・アイリス」が製作幹事をつとめる『海炭市叙景』を選定作品として全国巡回することが決っています。ひとりでも多くの人に映画館に足を運んでもらうためには何が必要なのか。理念から、入場料金の設定といった具体的なことまで、幅広く考えます。

13:30 開会

主催者挨拶

コミュニティシネマセンター活動報告

13:45~15:30

■ 基調報告「メディア芸術センターとしてのコミュニティシネマ」

基調報告 I :

山口情報芸術センターの中の“映画”(仮題)

講師:阿部一直(YCAM 学芸課長)、堀家敬嗣(山口大学)ほか

美術館や図書館といった文化施設は映像メディア芸術をどのように取り扱ってきたのか。世界的な動向、近年の日本の状況を踏まえながら、メディアテクノロジーを事業の核とする山口情報芸術センターのコンセプト、活動などをご紹介します。

基調報告 II :コミュニティシネマの未来形“映像メディアセンター”プラン(仮題)

プラン 1:弘前市吉井酒造煉瓦倉庫アートメディアセンター構想

立木祥一郎(teco LLC 代表)

プラン 2:「空想のメディア芸術センター」構想(仮)

小野田泰明(東北大学大学院工学研究科教授)

巨大な文化施設をつくるわけではない、地域の「メディア芸術センター」とは一体どんなものになるのか。実現可能な、コミュニティシネマの未来形としての、ふたつのプランを提案させていただきます。

15:45~17:15

■ ディスカッション:“メディア芸術センター”としてのコミュニティシネマの可能性

メディア芸術センターとは何か。基調報告をもとに、メディア芸術センターの具体的なあり方を考えます。そこに盛り込まれるアニメーションや漫画、ゲーム、メディア・アートをどう見せるのか。地域フィルムアーカイブや映像ライブラリー（図書館）機能をどう盛り込めばいいのか、専門家の考えを聞きます。さらに、国レベルのメディア芸術の振興は、どのような形で行われようとしているのか、永年の懸案となっている中心市街地活性化の中でコミュニティシネマやメディア芸術センターが果たしうる役割とは何か。多様な視点からメディア芸術センターについて考えます。

司会:堀越謙三（コミュニティシネマセンター代表理事/ユーロスペース代表/東京芸術大学教授）

1977年よりシネクラブとしての活動を開始。1982年配給会社・ミニシアター「ユーロスペース」を設立。ヴェンダース、張芸謀、アルモドバル、カラックス、キアロスタミ、オゾンらを日本に初めて配給した。「スモーク」「TOKYO EYES」「ポーラ X」「まぼろし」など、海外との共同製作、若手監督等の作品の製作も手がける。1997年、映画美学校を開校。1998年金沢市の香林坊に映画館「シネモンド」を開館。2005年4月より東京芸術大学大学院映像研究科教授。2009年一般社団法人コミュニティシネマセンター代表理事に就任。

パネリスト:

小泉秀樹（東京大学大学院准教授）

1964年生まれ。東京大学大学院博士課程修了。東京理科大学助手、東京大学講師を経て現職。主著『スマート・グロース』（西浦定継と共編、学芸出版社）、編著に叢書「シリーズ都市再生」（日本経済評論社）、「まちづくり百科事典」（丸善）などがある。

佐伯知紀（文化庁芸術文化課芸術文化調査官）※予定（変更になる可能性があります）

東京国立近代美術館フィルムセンター研究員を経て、03年から文化庁に勤務。04年から本格的に始動した「日本映画・映像振興プラン」の諸事業の立ち上げに関わり、映像分野の拡充に伴走しつつ今日に至る。映画史家として「映画読本 伊藤大輔」（フィルムアート）「映画美術に賭けた男 中村公彦」（草思社）等の編著がある。

岡島尚志（東京国立近代美術館フィルムセンター主幹）

1979年から、フィルムセンターの上映・保存・調査・出版・国際交流事業、各種イベントの企画・運営に携わる。代表的なキュレーション番組に「ラオール・ウォルシュとその時代」(86)「知られざるアメリカ映画」(93)「日本映画の発見」(96~02)「ハワード・ホークス映画祭」(99)「韓国映画—栄光の1960年代」(02)等があり、2005年より現職。国際フィルム・アーカイブ連盟(FIAF)の活動にも積極的にに関わり、運営委員、副会長を経て、2009年5月、会長に就任。アジア初のFIAF会長の誕生となった。

このほか、

アニメーション関係者

中心市街地活性化担当省庁関係者を予定しています。（確定次第お知らせします）

ディスカッションの前に、ペドロ・コスタ監督（「何も変えてはならない」「ヴァンダの部屋」ほか）がこのテーマについて語ったインタビューを上映します。

■ 17:20~18:30

プレゼンテーション:「新しいコミュニティシネマ」

[1] 下関「シアター・ゼロ」

2007年、下関で『風の外側』を撮った奥田瑛二監督は、10月に下関市の唯一の映画館である「下関スカラ座」が閉館すると聞き、自分の映画を下関の映画館で上映したいという強い思いから、この映画館の運営に乗り出すこととなります。2007年11月10日のリニューアルオープンから3年、奥田監督の映画館への思いをビデオレターでご紹介します。

[2] 鎌倉市川喜多記念館

2010年春、映画の発展に大きく貢献した川喜多長政・かしこ夫妻の旧宅跡に、新しい映画の専門施設が開館しました。映画の上映はもちろんのこと、映画資料の展示やワークショップなども行われる新しいシネマテークをご紹介します。

[3] 浜松市「シネマ・イーラ」

シネマ・イーラは、永年にわたり「浜松東映」の支配人をつとめてきた榎本雅之氏が、2008年に浜松東映が撤退するのを機に東映を退社し、同館跡を借り受けて、リニューアルオープンした映画館です。毎年秋に開催される「浜松映画祭」の主会場ともなっており、浜松市の映画ファンの厚い信頼を得ています。

[4] 川崎市アートセンター+KAWASAKI しんゆり映画祭—『悲しみのミルク』の配給

川崎市アートセンターとKAWASAKI しんゆり映画祭は、2009年のベルリン国際映画祭金熊賞(グランプリ)を受賞した『悲しみのミルク』の配給に乗り出すことになりました。コミュニティシネマ(映画祭と映画館)が映画を配給する、そんな新しい試みがスタートしています。

■19:00- レセプション

9月11日[土]

デジタルシネマ元年といわれる中、コミュニティシネマはデジタル化にどう向き合うべきなのか。

コミュニティシネマ会議、二日目は、デジタル化の進行の中で、クラシック作品をオリジナルのプリントで上映する環境をどのように維持していくのかという問題と、コミュニティシネマにとって最良のデジタルシネマの上映環境とはどういうものなのかという、ふたつの課題をじっくり考えます。

10:00～11:45

■ 名画座フォーラム(仮)～日本映画クラシック作品の上映環境を考える

配給会社と上映者(名画座を中心とする映画館や文化施設など)が共同で、日本映画クラシック作品をオリジナルの状態でも上映できる環境を守ること、よりよい状況をつくっていくを考えます。

パネリスト:

内藤篤(渋谷「シネマヴェーラ」館主/プレゼンター、司会)

映画・音楽・演劇・出版・プロスポーツ等のエンターテインメントおよびメディア関連の法実務が専門。著書「ハリウッド・パワーゲーム／アメリカ映画産業の『法と経済』」(TBS プリタニカ)「走れ、エロス！」(筑摩書房)「エンターテインメント・ロイヤルの時代」(日経 BP)等。訳書「エンターテインメント・ビジネス—その構造と経済」他。2006年1月東京渋谷に名画座「シネマヴェーラ」を開館。

とちぎあきら(東京国立近代美術館フィルムセンター主任研究員)

ニューヨーク大学大学院映画研究科修士課程を卒業後、「月刊イメージフォーラム」編集長を経て、フリーで映画に関する翻訳や執筆をするかたわら、「アモス・ギタイ映画祭」「イスラエル映画祭」「地中海映画祭」の作品選定に関わり、2001年～2002年、ヨーロッパ、アメリカ、韓国で「映画文化振興制度調査」を行う。2003年、フィルムセンター主任研究官となり、日本映画の保存収集、研究に従事する。

この他

名画座関係者

日本映画配給関係者多数参加予定。(確定次第お知らせします)

— [11:45～12:30 休憩] —

12:30～14:00

■ 講義 デジタルシネマの現在

デジタルシネマをどう活用し、映画館の活動を拡大していくのか。

コミュニティシネマが備えるべき最低限必要なデジタル機材、コミュニティシネマのスタンダードとなる「デジタルシネマ」とはどのようなものなのか。詳細に講義していただきます。

講師:

堀三郎(アテネ・フランセ文化センター)

アテネ・フランセ文化センターの製作担当チーフとして、アジアフォーカス・福岡映画祭、東京国際映画祭、釜山国際映画祭など多くの映画祭の製作業務に携わる。字幕投影装置(特許)の開発設計の仕事が高く評価され、1994年度日本映画ベンクラブ奨励賞を受賞。川崎市アートセンターや、新潟県十日町市「シネマパラダイス十日町」など、各地に設立される映像関連施設の企画にも数多く関わっている

山崎裕也(インフィニウム/スキップシティテクニカルアドバイザー)

放送番組等の制作技術を経て、世界初のDVノンリニア編集システムの開発に携わる。その後、スキップシティのテクニカルスーパーバイザーとしてDシネマ制作～上映の普及に尽力。現在、技術コンサル・SI等で活動中。SMPTE会員。

14:15 会議終了

映画上映

9月11日(土)

[1]『海炭市叙景』(2010/152分 監督:熊切和嘉 主演:加瀬亮)

2011年春の公開に先駆けたプレミア上映

14:30～ 函館シネマ・アイリスのプレゼンテーション

14:45～17:17 上映

『海炭市叙景』は、村上春樹、中上健次らと並び評せられながら、文学賞に恵まれず、90年に自ら命を絶った不遇の小説家・佐藤泰志が、故郷である函館をモデルにした“海炭市”を舞台に、そこに生きる人々の姿を描き出す未完の連作短編小説です。この“海炭市”＝函館の市民によって、この未完の小説の映画化が企画され、函館の映画館「シネマ・アイリス」が製作幹事となって、映画『海炭市叙景』が完成しました。監督は北海道出身の熊切和嘉、メインキャストには、この企画に賛同した谷村美月、竹原ピストル、加瀬亮、あがた森魚、村上淳、小林薫、南果歩らが顔をそろえました。

冬の日々、“海炭市”という架空の町でつむがれる五つの物語、見る人の心を深く揺さぶる傑作の誕生です。

[2]「ポルトガル映画祭 2010－マノエル・ド・オリヴェイラとポルトガル映画の巨匠たち」プレミア上映

2010年は、日本ポルトガル修好通商条約締結150年という記念の年です。この記念の年にシネマテーク・プロジェクト第3弾として「ポルトガル映画祭 2010－マノエル・ド・オリヴェイラとポルトガル映画の巨匠たち」が開催されます。日本初公開作品5本を含む12作品を巡回する、このプロジェクトから、ポルトガル映画史の中で重要な位置を占める『トラス・オス・モンテス』をプレミア上映します。

17:30～19:18

『トラス・オス・モンテス』

監督・脚本:アントニオ・レイス、マルガリーダ・コルデイロ

ポルトガル現代詩を代表するアントニオ・レイスが、マルガリーダ・コルデイロと共に作った初長篇。川遊びなどにうち興じる子供たちの姿を中心に、遠い山奥のきらきらと輝く宝石のような日々を夢幻的な時間構成により浮かび上がらせる。公開当時、フランスの批評家たちを驚嘆させ、後にペドロ・コスタ監督にも影響を与えたという伝説的フィルム。

お問い合わせ

コミュニティシネマセンター TEL:050-3535-1573 FAX:03-3461-0760 <http://www.jc3.jp>